

多様な手立てによる「総合的な国語の力」の育成
～説明的文章教材における「表現のスキル」の習得と活用をめざして～

II. 研究目的

(1) 説明的文章の教材を取り上げる必要性について

平成26～27年度の第25期研究では、文学的文章教材について実践を積み上げ、交流を図ってきた。これは、それまでの研究の中で、部会員のアンケート回答などから提起された「これまで積み上げた研究と今後の研究の継続性」という懸案の解決や、現行の学習指導要領に見られる、いわゆる「新しい指導観」への偏重を避けるための対策として、より多彩な切り口での学習構成が可能であり、授業者の裁量の幅が広いと思われる文学的文章教材を対象として取り上げたものである。果たして、2ヶ年の研究実践の中では、事務局が提案した3つの学習構成モデルに基づいて、数多くの授業実践・提言がなされ、新旧それぞれの「指導観」の良さと課題が浮き彫りになった。

また、第25期研究におけるもう一つの柱であった「表現のしくみ」については、小学校6年間を見通した「系統表」を作成し、指導内容の拠り所として授業作りに活用するとともに、検証・検討を行う中で、資料としての価値を高めることができた。今後も、指導要領や教科書の改訂に応じて、時代に合わせて見直し・検討を重ね、永く活用して行きたい成果の一つと言えよう。

研究の対象を文学的文章教材に絞ったことで、時代の変化・要請に対応しながら、部会員の幅広い課題意識を許容し、かつ共同研究として大切な、授業の観点や討議の柱などの「足並みを揃えた」研究実践が可能となった。一方で、平成27年度の2次研究協議会で回収したアンケートの中からは、文学的文章教材以外を対象とした研究内容を望む意見が少なからず見受けられた。研究主題にある「総合的な国語の力」の育成を目指すとき、注力すべきは文学的文章教材だけではないということは言うまでもない。もちろん「領域」も「読むこと」に偏るべきではないが、「共同研究」として進めるためには、扱う領域や教材を絞ることもまた、必要であろう。

研究主題である「総合的な国語の力」を、いかに目の前の子どもたちに身に付けさせるかという試みは、まだ取りかかったばかりである。そこで、「読むこと」領域において、文学的文章教材と両輪を成す説明的文章教材の授業づくりを研究し、実践することで、とりわけ文章の読解を基本とする「読むこと」領域の授業づくりの充実を図りたい。

(2) 説明的文章の教材としての特徴

近年は、言語活動、特に「表現する」活動の工夫・充実が求められることが多い。その中でも、情景描写や心情など、「何を読み取るか」が学習活動の中心となる傾向にある文学的文章教材に対して、説明的文章教材は、事実や筆者の意図などを「いかに読み取るか」という「読むためのスキル」を学び、その後それを活用して、子どもたち自らの「話すこと」や「書くこと」活動につなげやすいという特徴がある。

たとえば、現行指導要領では、「第1学年及び第2学年」の「A話すこと・聞くこと」の指導事項には「順序立て」の文言が、同じく「B書くこと」の指導事項にも「事柄の順序に沿って」との文言が見られる。これは、「C読むこと」の「説明的な文章の解釈に関する指導事項」の中の「イ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」と強く結びついている。また、指導要領の各領域の中で繰り返し用いられる「目的に応じて」という表現も、「C読むこと」においては、「説明的な文章の解釈に関する指導事項」に含まれている。

さらに、昨今重要とされてきた、いわゆる「単元を貫く言語活動」を実現しようとするならば、こうした各領域を横断する指導事項を共有する説明的文章教材は、より多様な活動と結びつけることができ、文学的文章教材とは異なる切り口で、指導計画や手立てを工夫することができると言えよう。

(3) 「多様な手立て」について

前項で述べたように、説明的文章教材の学習活動は、教材文の「読解」と、その後の発展的な「言語活動」へ

の応用とをひとつながりで考えるべきである。つまり、「読むためのスキル」(＝筆者が用いたスキル)に基づいて教材文を読み解く「読解」と、スキルを生かして、子ども自らがまとめたり表現したりする「言語活動」の2つの場面を組み合わせて構成するということである。

どちらの場面も「総合的な国語の力」をつけるためには重要であり、軽重をつけて扱うべきものではない。それでも、平成28年度は、目の前の子どもたちの実態によっては、結果的にどちらかにより重点を置いて指導計画を作成することになると考え、どちらかに重点を置いた指導計画を、それぞれ『読解』重点型、『言語活動』重点型として指導計画の作成を試みた。授業者がどの場面に重点を置いて指導計画を立てるのかを明確に意識できるように示した2つの「型」であったが、1年次を終えて、「ねらいを意識しやすい」「検証の焦点化が図られた」等の成果が挙げられた一方で、「どちらも大切で、分けることに意味がない」「結局は単元計画に大きな違いはない」等、授業づくりを進める上で必ずしも有効ではなかったという意見も多かった。

そこで、2年次目となる平成29年度は、「子どもたちにつけたい力」(＝「表現のスキル」)と力をつけるための「手立て」にテーマを絞り、特に「型」に当てはめることなく、授業づくりを進めて行くこととする。何よりも大切にすべきは、目の前の子どもたちの実態に基づく「つけるべき力」であり、年間を通じて学年相応の総合的な国語の力を育むことである。そのためにも、実践を進める前に、いつ、どの教材で、どんな力をつけさせるのかを見通して「年間指導計画」を作成することがまずは重要である。その上で、子どもの実態と「つけたい力」に応じて、教材の特性を生かした「手立て」を講じて学習活動を進めることで、次の学年や発達段階につながる国語の力が身につくものと考え。

本研究における「手立て」とは、教材文の読解場面では、説明的文章を読み解くための「スキル」を身に付けさせるための「課題設定」や「発問」であったり、学習の動機付けとなるような様々な「仕掛け」だったりする。また、発展的言語活動の場面では、身に付けた「スキル」を自らの表現に生かせるような「言語活動」そのものも含まれよう。この「手立て」にこそ授業者の意図や工夫(オリジナリティ)が現れるものと考え。どのような「手立て」を講じるかは、「単元の指導計画」作成の際の一番の「柱」である。

(4) 副題「説明的文章教材における『表現のスキル』の習得と活用をめざして」について

説明的文章教材を読むときには、筆者が読み手にわかりやすく伝えるために用いた「スキル」を意識して読むことになる。これは、文学的文章教材の「登場人物」や「山場」のようないわゆる「表現のしくみ」と同様で、習得し、意識して読むことで、文章の内容ををより効率的に、正しく理解することができる。この言わば「読むためのスキル」の習得は、説明的文章教材を学習する第一の意義である。

逆に、自らが話したり書いたりする場面では、「読解」の学習活動で身に付けた「読むためのスキル」を「伝えるためのスキル」として応用することになる(そもそも、「読むためのスキル」は、教材文の筆者が用いた「伝えるためのスキル」である)。聞き手や読み手に、より理解してもらいやすいように、この「スキル」を効果的に使えるようにすることが、説明的文章教材を学習する第二の意義である。

本研究ではこれら「スキル」を総じて「表現のスキル」と呼ぶことにした。ここで言う「スキル」は、例えば現行の学習指導要領では「指導事項」として挙げられており、低学年では「時間や事柄の順序」、中学年では「段落相互の関係」や「事実と意見との関係」、高学年では「要旨」や「事実と感想、意見などとの関係」がキーワードになっている。

まず、指導要領上の「指導事項」を具体的で簡潔な言葉に置き換え、それらを「スキル」として、「文章構成」や「文法など」のカテゴリーに分類した。さらに、現行の教科書(教育出版「ひろがる言葉」)に掲載された教材や言語活動例、学習のポイントをまとめたコラム「ここが大事」の内容などと関連させて、学年ごとにまとめた。こうして、小学校の6年間で系統立てて指導できるように一覧表として試作したものが、別表の『表現のスキル』系統表である。第25期研究で作成、検討した「文学的文章における『表現のしくみ』系統表」の、いわゆる説明的文章版である。平成28年度に部会員よりいただいた意見も参考に、若干の手直しを加えた。現時点では、カテゴリー分けの妥当性も含めて単なる抜粋の域を出ないが、各学年で身に付けるべき基本的な「表現のスキル」の一覧となっているので、子どもたちの実態把握の際の基準として、また、年間指導計画を作成する際に「学年の指導事項」を確認する資料の1つなどとして使用しながら、部会全体で、より有用な資料として育てていただきたい。

説明的文章教材の指導に当たっては、「表現のスキル」の習得と活用の2本立ての学習構成を工夫することで、

「読むこと」のみならず「話すこと・聞くこと」、「書くこと」領域まで及ぶ、まさに「総合的な国語の力」を育成することにつながると考える。

Ⅲ. 研究内容

(1) 研究領域

「読むこと」領域における「説明的文章」教材

(2) 研究の柱

- ① 「読む力」を身に付けさせるために、「表現のスキル」に基づいて、説明的文章を効率的に正しく読み取るための手立ての工夫
- ② 身に付けた「表現のスキル」を自分の表現（話すこと・書くこと）に活かすための手立て（＝「言語活動」）の工夫
- ③ 「説明的文章教材の『表現のスキル』系統表」の妥当性の検証

(3) 教育課程研究

教育課程委員会において、第26期研究の一環として、第二次研究協議会で扱う教材以外の説明文教材について、「指導案集」（単元の指導計画・本時案・言語活動例など）を試作し、部会員に配布する（予定）。

Ⅳ. 研究方法

(1) 平成28、29年度の2カ年計画で行う。

(2) 中心サークルを設け、石教研第二次研究協議会において授業提言を行う。

ただし各市町村第二次研究協議会における授業公開および石教研第二次研究協議会での提言を行う学年と教材については、討議の場での共通理解を図るため、原則次の通りとする。

- 1年生・・・はたらく じどう車
- 2年生・・・さけが大きくなるまで
- 3年生・・・くらしと絵文字
- 4年生・・・ウミガメの命をつなぐ
- 5年生・・・世界遺産 白神山地からの提言一意見文を書こう
または まんがの方法
- 6年生・・・ぼくの世界、君の世界

※5年生については、授業公開の時期に該当する教材は「白神山地」であるが、より「読むこと教材」に適した「まんがの方法」との入れ替えて授業づくりを行うことも可とする。

なお、授業を行う学年の指定は行わない。

(3) 各市町村サークルは、主題の解明を図るために、以下の要領で部会研究を進める。

- ・ 授業学年の説明的文章教材について、「どの教材でどのような力を付けさせたいか」を児童の実態を鑑みながら検討し、年間指導計画（別紙例参照）を作成する。
- ・ 年間指導計画に沿って、公開授業単元の学習構成を検討する。
- ・ 授業公開後、事後研をもち、提言をまとめる。

※年間指導計画のフォーマットは事務局で作成し、HPに掲載する。

※指導案形式、提言の形式については新年度発行予定の「研究ガイド」に掲載する。

(4) 『『表現のスキル』系統表』については、HPに掲載した上で、その妥当性については、部会内外からの意見を随時受け付けるとともに、石教研第二次研究協議会の分科会討議およびアンケートで、部会員からの意見を集め、2カ年を通じてより適切な内容に発展させる。

(5) 実技理論研修会を開催し、今研究に関わる学習および日常の実践に活きる学習の場を設定する。

Ⅴ. 研究体制（組織・運営）

- (1) 研究中心サークルを、平成28年度は恵庭市、平成29年度は石狩市とする。(次期研究1年次の平成30年度は北広島市の予定。)
- (2) 分科会構成は、低・中・高の3ブロックとする。
- (3) 分科会での研究協議は、中心サークルの授業提言の他、各市町村サークルの提言を主とする。個人レポート提言も受け付ける。また、分科会協議の深化を図るため、各市町村の提言状況やレポート数によって、時間配分を考慮する。
- (4) 推進委員研修会(部会役員・各市町村の推進委員)を組織し、研究計画の具体化や石教研第二次研究協議会の運営等について協議する。
- (5) 定期的に部会報「はまなす」を発行し、研究内容や各種研修会の周知等に努める。
- (6) 不定期に「研究ガイド」を発行し、部会研究の取り組みの向上と焦点化を図る。

VI. 年間活動計画

時期	会議名・事業名	内容
4月	・石教研専門部会第一次研究協議会・役員研修会 ・「はまなす」No.1発行	研究計画、研究体制の確認
	・研究ガイドNo.1発行	年間指導計画様式
5月	・役員研修会 ・推進委員研修会①	各市町村提言予定状況の確認
6月	・「はまなす」No.2発行	各市町村提言予定状況、部会事業計画、サークル便り交流
	・研究ガイドNo.2発行	指導案形式
7月	・推進委員研修会② ・役員研修会	第二次研究協議会開催要項検討
	・実技理論研修会	授業公開、理論研修
8月	・「はまなす」No.3発行	第二次研究協議会、運営委員研修会開催要項
	・実技理論研修会(予定)	
9月	・「はまなす」No.4発行	第二次研究協議会直前情報
10月	・第二次研究協議会運営委員研修会	第二次研究協議会開催要項確認
	・石教研専門部会第二次研究協議会	授業提言、分科会交流
11月	・推進委員研修会③ ・役員研修会	第二次研究協議会の交流
		アンケート見解検討
	・「はまなす」No.5発行 ・管内詩集『石狩の子』原稿提出締め切り	「石狩の教育」原稿検討 アンケート集約、見解
12月	・役員研修会	次年度研究内容の立案、検討
	・管内詩集『石狩の子』編集作業	
1月	・役員研修会	次年度研究内容の検討
	・推進委員研修会④	次年度研究計画案提示、検討
2月	・推進委員研修会⑤	次年度研究計画案意見集約、検討
	・役員研修会	次年度研究計画修正検討
	・管内詩集『石狩の子』発行	
3月	・「はまなす」No.6発行	次年度研究計画(決定版)

※教育課程委員会、『石狩の子』編集委員会については、随時開催する。

(文責 金丸 剛輝)